

【晉紀十一】 起關雎閨茂，盡柔兆困敦，凡三年。

■西晉、▲慕容氏、漢劉氏漢、続国訳漢文大成. 経子史部 第 5 卷 273p

孝愍皇帝下建興二年（甲戌，314年）

■春，正月，辛未（－1日?），日の如き有りて地に隕つ。又た三日有りて相い承け（占星術では、三日並び出るは諸侯が帝たらんと争う兆し），西方に出でて而して東行す。

■丁丑（6日），大赦す。

漢 [流星は後宮の乱れを表わすか] 流星有り牽牛に出で，紫微に入り，光は地を燭し，平陽の北に墜ち，化して肉と為り，長は三十歩，廣さは二十七歩。漢主の聰は之を惡み，以て公卿に問う。陳元達は以て為す、

「女の寵太いに盛んにして，亡國之征（続は徵）なり。」

聰は曰く、

「此くは陰陽之理なり，何ぞ人事に關せん！」

聰の後の劉氏は賢明にして，聰の為す所に不道あれば，劉氏は毎に之を規正す。己丑（18日），劉氏は卒し，諡して武宣と曰う。是より嬖寵競び進む，後宮に序無し矣。（5-274p）

漢 [漢の七公將軍制度] 聰は丞相等七公（以下にあり）を置く。又た輔漢等の十六大將軍を置き，各々兵二千を配し，諸子を以て之を為す。又た左右の司隸を置き，各々戸二十餘萬を領せしめ，萬戸に一内史を置く。單于の左右輔は，各々六夷（胡・羯・鮮卑・氐・羌・巴蠻 or 烏丸）十萬落の主となり，萬落に一都尉を置く。左、右選曹尚書は，並びて選舉を典る。司隸より以下六官は，皆な位は僕射に亞す。其の子の榮を以て丞相と為し，大將軍を領し、尚書事を録せしめ，進めて晉王に封じる。江都王の延年に尚書六條（吏部・三公・客曹・駕部・屯田・度支）事を録せしめ，汝陰王の景を太師と為し，王育を太傅と為し，任顗を太保と為し，馬景を大司徒と為し，朱紀を大司空と為し，中山王の曜を大司馬と為す。

【石勒は王浚追い落としを計画】

漢 [石勒は王浚に皇帝即位を偽り勧める] 壬辰（21日），王子春（石勒の舍人）等及び王浚の使者は襄國に至り，石勒は其の勁卒、精甲を匿し，羸師（疲れ弱った軍隊）虚府（空虚な府庫）以て之に示し，北面（皇帝謁見に準じる意味）して使者を拜し而して書を受ける。浚は勒に塵尾（拂子、晉の王公貴人多く塵尾を執り、玉を以て柄と為す）を遺り，勒は陽りて敢えて執らず，之を壁に懸け，朝夕之を拜して，曰く、

「我は王公に見えるを得ず，其の賜わる所を見る，公に見える如き也。」

復た董肇を遣わして表を浚に奉じる、

「期するに三月中旬を以て親ら幽州に詣りて尊號を奉上せん」

亦た箋を棗嵩（王浚の娘婿）に修め，并州牧、廣平公を求める。

漢 [王浚の政治は苛刻、民心去る] 勒は浚之政事を王子春に問い，子春は曰く、

「幽州は去る歲大水にて，人は粒食せず（穀実らず飢饉），浚は粟百萬を積み，賑贍（貧困者、被災者などを救うために金品を施し与える）する能わず，刑政は苛刻にして，賦役は殷煩なり，忠賢は内に離れ，夷狄は外に叛す。人は皆な其の將に亡びんとするを知り，而して浚は意氣自若たり，曾て懼れる心無く，方に更に台閣を置

立し、百官を布列し、自ら謂うに漢高、魏武も比べて足りざる也。」

勅は幾（続は凡）を撫して笑いて曰く、

「王彭祖は真に擒とする可き也。」

浚の使者は薊に還り、具に言う、

「石勅の形勢は寡弱にして、款誠に二無し。」

浚は大いに悦び、益々驕怠にして、復た備えを設けず。

【李雄は蜀政権確立】

大成 **「楊虎は漢中を以て大成に降る」** 楊虎（前卷前年に始まる）は漢中の吏民を掠め以て成に奔り、梁州人の張賊等は兵を起こして楊難敵を逐う。難敵は去り、賊は其の地を以て成に歸し、是に於いて漢嘉、涪陵、漢中之地は皆な成の有と為る。成主の雄は李鳳を以て梁州刺史と為し、任回を寧州刺史と為し、李恭を荊州刺史と為す。

大成 **「李雄の名政、蜀のみ大乱せず」** 雄は己を虚しくして賢を好み、才に隨いて任を授ける。太傅の驤に命じて民を内に養わしめ、李鳳等をして外に招懷せしむ。刑政は寛簡にして、獄は滯囚無し。學校を興し、史官を置く。其の民に賦するは、男丁は歳に穀三斛、女丁は之の半、疾病なるも又た之の半なり。戸ごとの調は絹の數丈に過ぎず、綿は數兩なり。事は少なく役は希なり、民は多く富實なり、新附者は皆な復た除を給す。是の時天下は大亂するも、而して蜀は獨り無事なり、年穀は屢々熟し、乃ち閭門は閉じず、路に遺ちたるを拾わずに至る。漢嘉（前漢の蜀郡青衣県、後漢順帝陽嘉二年に漢嘉となり、蜀は漢嘉郡とす、四川省建昌道雅安県、現・雅安市雨城区）の夷王の冲歸、朱提の審炤、建寧の爨彊（夷人の姓）は皆な之に歸す。（5-275p）巴郡は嘗て急を告げ、晉の兵有りと雲う。雄は曰く、

「吾は常に琅邪の微弱にして、遂に石勅の滅ぼす所と為るを憂い、以て耿耿（憂える様）たるを為す、圖らず乃ち能く兵を擧げんとは、人をして欣然となさ使む。」

然るに雄の朝は儀器無く、爵位は濫溢す。吏は祿秩無く、給を民に取る。軍に部伍無く、號令は肅ならず。此れ其の短なる所也。

■ **「西晉朝廷の人事」** 二月，壬寅（2日），張軌を以て太尉、涼州牧と為し、西平郡公に封じる。王浚をして大司馬、都督幽、冀諸軍事と為す。荀組を司空と為し、尚書左僕射兼司隸校尉を領せしめ、留台事を行わしむ。劉琨を大將軍、都督并州諸軍事と為す。朝廷は張軌の老病を以て、其の子の實を拜して副刺史（前例無し）と為す。

【石勅は王浚を急襲】

漢 **「石勅は出陣逡巡、劉琨を調略」** 石勅は纂嚴（兵を集め出陣準備）し、將に王浚を襲わんとし、而して猶豫して未だ發せず。張賓は曰く、

「夫れ人を襲う者は、當に其の不意に出でるべし。今軍は嚴にして日を経て而して行かず、豈に劉琨及び鮮卑、烏桓の吾に後患を為すを畏れるに非らざる乎？」

勅は曰く、

「然り。之を奈何と為さんや？」

賓は曰く、

「彼の三方は智勇は將軍に及ぶ者無し、將軍は遠く出でると雖も、彼は必らず敢えて動かず、且つ彼は未

だ將軍の便ち能く軍を千里に懸けて幽州を取ると謂わざる也。輕軍にして往きて返ること、二旬を出ず、
藉使彼が心有りと雖も、其の謀議して師を出す比、吾は已に還らん矣。且つ劉琨、王浚は、同じく名は晉
臣と雖も、實は仇敵た為り。若し箋を琨に修め、質を送りて和を請えば、琨は必ず我之服するを喜び而して
浚之亡びるを快こころよしとし、終に浚を救いて而して我を襲わざらん也。用兵は神速を貴しとし、時に後れる
勿かれ也。」

勒は曰く、

「吾が未だ了せざる所、右侯は已に之を了す、吾は復た何ぞ疑わん！」

遂に火を以て宵行き、柏人（直隸省大名道唐山県の西、現・邢台市）に至り、主簿の游綸を殺す、其の兄の統が范陽に在るを以て、軍の謀の洩れるを恐れるが故也。遣使して奉箋し質を劉琨に送り、自ら罪惡を陳べ、浚を討ち以て自ら效さんと請う。琨は大いに喜び、檄を州郡に移し、稱す、

「己は猗盧と與に方に勒を討たんと議す、勒は走伏するに地無く、幽都を抜きて以て贖罪せんと求める。今便ち當に六修を遣わして南に平陽を襲い、僭偽之逆類（劉聰をいう）を除き、死を知る之逋羯（逋逃の羯虜、石勒）を降さん。天に順い民に副い、皇家を翼奉し、斯れ乃ち曩年（積年）の積誠、靈祐之致す所也！」

漢 [石勒は王浚を薊に攻め、誅殺] 三月、勒の軍は易水に達し、王浚の督護の孫緯は馳せて遣わして浚に白わしめ、將に兵を勒して之を拒まんとし、游統は之を禁じる。浚の將佐は皆な曰く、

「胡は貪に而して信無く、必ず詭計有らん、請う之を撃たん。」

浚は怒りて曰く、

「石公の來たるは、正に我を奉戴せんと欲する耳。敢えて撃たんと言う者は斬らん！」

衆は敢えて復た言わず。浚は饗を設けて以て之を待つ。壬申（2日）、勒は晨に薊に至り、門者を叱して開門す。猶ほ伏兵有るを疑い、牛羊數千頭を先驅させ、

「禮をたてまつ上る」（牛羊を送るは禮をたてまつることになる）

と聲言し、(5-276p) 實は諸々の街巷を塞がんと欲する。浚は始めて懼れ、或いは坐り或いは起つ（狼狽する様）。勒は既に入城し、兵を縦ちて大いに掠め、浚の左右は之を御がんと請い、浚は猶ほ許さず。勒は其の聽事（中庭、訴訟の場）に升起、浚は乃ち走りて堂皇（四壁の無い堂）に出で、勒の衆は之を執る。勒は浚の妻を召し、之と並びと坐らせ、浚を執りて前に立たしむ。浚は罵りて曰く、

「胡奴は乃公（我が輩、尊大な言い方）に調たわむ（戯、からかう）る、何の凶逆なること此くの如しや！」

勒は曰く、

「公の位は元台に冠たり、手に強兵を握り、坐して本朝の傾覆を觀、曾て救援せず、乃ち自ら尊びて天子と為らんと欲す、凶逆に非らざる乎！又た奸貪に委任し、百姓に殘虐し、忠良に賊害し、毒は燕土に遍く、此れ誰之罪也！」

其の將の王洛生をして五百騎を以て先ず浚を襄國に送ら使む。浚は自ら水に投ず、束ね而して之を出し、襄國の市に於いて斬る。

漢 [石勒は裴憲・荀綽を得たり] 勒は浚の麾下の精兵萬人を殺し、浚の將佐等は争いて軍門に詣りて謝罪し、饋賂は交錯す。前尚書の裴憲（幽州に走るは87卷懷帝永嘉五年にあり）、從事中郎の荀綽は獨り至らず、勒は召し而して之を讓めて曰く、

「王浚は暴虐にして、孤は討ち而して之を誅す、諸人は皆な來たりて慶謝す、二君は獨り之と同惡にして、將に何を以てか其の戮を逃れんとする乎！」

對えて曰く、

「**憲**等は世々晉朝に仕え、其の榮祿を荷なう、**浚**は凶粗と雖も、猶ほ是れ晉之藩臣なり、故に**憲**等は之に従い、敢えて貳（二心）有らず。明公は苟くも徳義を修めず、専ら威刑を事とし、則ち**憲**等は死は自ら其の分なり、又た何ぞ逃れん乎！請う死に就かん。」

拜せず而して出る。**勒**は召し而して之を謝し、待つに客禮を以てす。**綽**は、**勛**之孫也。**勒**は**朱碩**、**棗嵩**等を數めるに賄を納め（前卷前年）政を亂り、幽州の患いと為るを以てし、**游統**を責めるに事える所に忠ならざる（**游統**が**範陽**を以て私に**石勒**に附かんとした事）を以てし、皆な之を斬る。**浚**の將佐、親戚の家貲を籍するに、皆な巨萬に至り、惟だ**裴憲**、**荀綽**は止だ書の百餘帙、鹽米の各々十餘斛有り而して已む。**勒**は曰く、「吾は幽州を得たるを喜ばず、二子を得たるを喜ぶ。」

憲を以て從事中郎と為し、**綽**を參軍と為す。流民を分遣し、各々郷里に還らしむ。**勒**は薊に二日停まり、**浚**の宮殿を焚き、故の尚書の燕國の**劉翰**を以て幽州刺史を行い、薊を成らしめ、守宰を置き而して還る。**孫緯**は遮りて之を撃ち、**勒**は僅かに而して免かるるを得たり。

漢 **[王浚の首を漢に送るも、陝を分ける]** **勒**は襄國に至り、遣使して**王浚**の首を奉じて漢に捷ちを獻じ、漢は**勒**を以て大都督、督陝東（陝を分かつの義を取りて之を授ける）諸軍事、驃騎大將軍、東單于と為し、十二郡を増封す。**勒**は固辭し、二郡を受けて而して已む。

■ **[劉琨は石勒の七州制覇に駭懼]** **劉琨**は兵を拓跋猗盧に請い以て漢を撃つ、會々**猗盧**の部する所の雜胡萬餘家は**石勒**に應じんと謀り、**猗盧**は悉く之を誅し、**琨**に赴くの約を果たさず。**琨**は**石勒**の降る意無きを知り、乃ち大いに懼れ、上表して曰く、

「東北の八州は、**勒**は其の七（二冀州刺史・二兗州刺史・豫州刺史・青州刺史・幽州刺史など）を滅ぼす。先朝の授ける所、(5-277p) 存する者は惟だ臣のみ。**勒**は襄國に據り、臣（山西の晉陽による）とは山（太行山脈）を隔て、朝發すれば夕には至り、城塙は駭懼し、忠憤を懷くと雖も、力は願いに従わざる耳！」

【流民は慕容廆を頼り、勢力拡大】

■▲ **[劉翰・邵續は石勒に附かず、慕容廆は流民の郡を置く]** **劉翰**は**石勒**に従うを欲せず、乃ち段匹磾に歸し、匹磾は遂に薊城に據る。**王浚**の從事中郎の**陽裕**は、**耽之**の兄の子也、逃げて令支（段氏の拠点、直隸省津海道遷安県、現・唐山市遷安市）に奔り、**段疾陸眷**に依る。會稽の**朱左車**、魯國の**孔纂**、泰山に**胡母翼**は薊より逃げて昌黎に奔り、**慕容廆**に依る。是の時中國の流民の**廆**に歸する者は數萬家あり、**廆**は冀州人を以て冀陽郡と為し、豫州人をして成周郡と為し、青州人をして營丘郡と為し、并州人をして唐國郡と為す。初め、**王浚**は**邵續**を以て樂陵太守と為し、厭次（前漢の平原郡富平県、後漢明帝が厭次に改名、晉は分けて樂陵に属す、山東省濟南道陽信県、現・浜州市陽信県）に屯す。**浚**は敗れ、**續**は**石勒**に附く、**勒**は**續**の子の**乂**を以て督護と為す。**浚**の署する所の勃海太守の東萊の**劉胤**は郡を棄てて**續**に依り、**續**に謂って曰く、

「凡そ大功を立てるは、必ず大義に杖るべし。君は、晉之忠臣なり、奈何して賊に従いて以て自ら汚す乎！」

會々**段匹磾**は書を以て**續**を邀え同じく左丞相の（司馬）**睿**に歸せんとし、**續**は之に従う。其の人は皆な曰く、

「今**勒**を棄てて**匹磾**に歸すれば、其れ**乂**を如何せん？」

續は泣いて曰く、

「我は豈に子を顧み而して叛臣と為るを得ん哉！」

異議ある者數人を殺す。**勒**は之を聞き、**乂**を殺す。**續**は**劉胤**を遣わして江東に使いせしめ、**睿**は**胤**を以て

參軍と為し、**續**を以て平原太守と為す。**石勒**は兵を遣わして**續**を圍み、**匹磾**は其の弟の**文鴛**をして之を救わしめ、**勒**は引いて去る。

漢 **襄國**は大いに饑え、穀升は直^{あた}銀一斤、肉一斤は直銀一兩なり。

■ **〔杜苾と陶侃の連戦〕****杜苾**（杜弼、流民勢力の首領、蜀郡成都の出身の元西晋官僚）の將の**王真**は**陶侃**を休障（湖北省江漢道漢陽県の西、現・武漢市漢陽区）に襲い、**侃**は**瀟**（河、湖北省黄安县と河南省羅山県が出る二水が黄陂県の境で合し、瀟口鎮に至り淪水に會して揚子江に入る）中に奔る。**周訪**は**侃**を救い、**苾**の兵を撃ち、之を破る。

前涼 **〔前涼創始者張軌は薨ず〕** **夏**、**五月**、西平の武穆公の**張軌**は疾に寝ね、遺令す、
「文武將佐は、務めて百姓を安んじ、上は國に報いんことを思い、下は以て家を寧んじよ。」
己丑（20日）、**軌**は薨ず。長史の**張璽**等は世子の**寔**（テキストは實だが、続の寔とする）を表して父の位を攝せしむ。

漢 **〔趙染は新豊で索綝を輕んじて敗戦〕** **漢**の中山王の**曜**、**趙染**は長安を寇す。**六月**、**曜**は渭汭（渭水の隈曲する所、陝西省關中道華陰県東北、現・渭南市華陰市）に屯し、**染**は新豊に屯し、**索綝**（続は索綝、索絲林は無理、敦煌出身、字は巨秀）は兵を將いて出でて之を拒む。**染**は**綝**を輕んじる之色有り、長史の**魯徽**は曰く、
「晉之君臣は、自ら強弱の敵せざるを知り、將に我に死を致さんとす、輕んず可からざる也。」
染は曰く、

「**司馬模**（87 卷懷帝永嘉五年）之強きを以てさえ、吾は之を取ること朽ちたるを拉すが如し。**索綝**は小豎なり、豈に能く吾が馬蹄、刀刃を汚さん邪！」

晨に、輕騎數百を帥いて之を逆えて、曰く、

「要ず當に**綝**を獲り而して後に食せん。」

綝と城西（新豊の城西）に於いて戦い、**染**の兵は敗れ而して歸り、悔いて曰く、

「吾は**魯徽**之言を用いず以て此に至る、何の面目ありてか之に見えん！」

先ず命じて**徽**を斬らしむ。（5-278p）**徽**は曰く、

「將軍は愚愎にして以て敗を取る、乃ち復た前にいるを忌みて勝れるを害し、忠良を誅し以て忿りを逞しくす、猶ほ天地有り、將軍は其の死を枕席に得ん乎！」

詔して**索綝**に驃騎大將軍、尚書左僕射を加え、尚書を錄さしめ、製を承けて事を行わしむ。

漢 **〔郭默は逃亡して李矩に合流〕** **曜**、**染**は復た將軍の**殷凱**と衆數萬を帥いて長安に向う、**麴允**は馮翊に於いて逆え戦い、**允**は敗る。兵を收め、夜、**凱**の營を襲い、**凱**は敗死する。**曜**は乃ち還りて河内太守の**郭默**を懷に攻め、三屯を列して之を圍む。**默**の食は盡き、妻子を送りて質と為し、**曜**に糴を請う。糴は畢わり、復た城を嬰して固く守る。**曜**は怒り、**默**の妻子を河に沉め而して之を攻める。**默**は**李矩**に新鄭（河南省開封道新鄭県、現・鄭州市新鄭市）に於いて投じんと欲し、**矩**は其の甥の**郭誦**をして之を迎え使む。兵は少なく、敢えて進まず。會々**劉琨**は參軍の**張肇**の子を遣わして鮮卑五百餘騎を帥いて長安に詣らんとし、道は阻みて通じず、還り、**矩**の營を過ぎ、**矩**は**肇**を説き、漢兵を撃た使む。漢兵は鮮卑を望見し、戦わず而して走り、**默**は遂に衆を帥いて**矩**に歸す。漢主の**聰**は**曜**を召して還りて蒲板に屯ぜしむ。

漢 **〔趙染は弩当たりて戦死〕** **秋**、**趙染**は北地を攻め、**麴允**は之を拒み、**染**は弩が中たり而して死す。

漢 **石勒**は始めて州郡に命じて實の戸口を閲し、戸ごとに帛二匹、穀二斛を出さしむ。

前涼■冬，十月，張寔を以て都督涼州諸軍事、涼州刺史、西平公と為す。

漢〔劉粲は驕奢専恣嚴刻復諫〕十一月，漢主の聰は晉王の粲を以て相國、大單于と為し，百揆を總べしむ。粲は少くして俊才有り，自ら宰相と為り，驕奢専恣にして，賢を遠ざけ佞に親しみ，嚴刻にして諫めに愎り，國人は始めて之を惡む。

■〔周繼の反乱〕周繼しゅうきようは其の父の遺言（前漢建興元年）を以て，吳人之怨むに因り，亂を作さんと謀る。吳興の功曹の徐馥いっつわをして矯りて叔父の丞相の從事中郎の札之命と稱し，徒衆を收合し，以て王導、刁協を討たしめ，豪傑は翕然して之に付き，孫皓の族人の弼も亦た兵を廣德（安徽省蕪湖道廣德縣、現・宣城市廣德市）に起こし以て之に應じる。

孝愍皇帝下建興三年（乙亥，315年）

■〔司馬睿は周繼を追求めず〕春，正月，徐馥は吳興太守の袁琇を殺し，衆數千有り，周札を奉じて主と為さんと欲す。札は之を聞き，大いに驚き，以て義興太守の孔侃に告げる。繼は札の意の同じからずを知り，敢えて發せず。馥の黨は懼き，馥を攻め，之を殺す。孫弼も亦た死す。札の子の續も亦た衆を聚めて馥に應じ，左丞相の睿は兵を發して之を討たんと議す。王導は曰く、

「今少しく兵を發すれば則ち以て寇を平らぐに足らず，多く兵を發すれば則ち根本は空虛となる。續の族弟の黃門侍郎の蒧は，忠果にして謀有り，請う獨り蒧をして往か使めれば，以て續を誅するに足りん。」睿は之に従う。蒧は晝夜兼行して，郡に至り，將に入らんとし，門に於いて續に遇い，續に謂って曰く、

「當に君と共に孔府君に詣り，論ずる所有り。」

續は肯えて入らず，蒧は牽逼して與に俱にする。坐は定まり，蒧は孔侃に謂って曰く、

「府君は何を以て賊を置きて坐に在らしむや？」

續は衣中に常に刀を置き，(5-279p) 即ち刀を操りて蒧に逼り，蒧は郡の傳教（郡官吏、教令宣傳役）の吳曾を叱して之を格殺（手で打ち殺す）せしむ。蒧は因りて繼を誅さんと欲し，札は聽さず，罪を從兄の邵に委ね而して之を誅す。蒧は家に歸りて母を省（みまう、安否を問う）せず，遂に長驅し而して去り，母は狼狽して之を追う。睿は札を以て吳興太守と為し，蒧を太子の右衛率と為す。周氏が吳之豪望（名望ある一族）なるを以て，故に窮治せず，繼を撫すは舊の如し。

■詔して平東將軍の宋哲を華陰（弘農郡の縣、陝西省關中道華陰縣、現・渭南市華陰市）に屯せしむ。

大成成主の雄は後の任氏を立てる。

■〔司馬睿は丞相〕二月，丙子（12日），琅邪王の睿を以て丞相、大都督、督中外諸軍事と為し，南陽王の保をして相國と為し，荀組を太尉と為し，豫州牧を領せしめ，劉琨をして司空、都督並、冀、幽三州諸軍事と為す。琨は司空を辭して受けず。

■〔陳安は害されても司馬保に忠〕南陽王の模之敗れる也（87 卷懷帝永嘉五年），都尉の陳安は往きて世子の保に秦州に歸し，保は安に命じて千餘人を將いて叛羌を討たしめ，寵待は甚だ厚し。保の將の張春は之を疾み，安を譖し，

「異志有り，之を除かんと請う」

と雲い，保は許さず。春は輒ち刺客を伏せて以て安を刺す。安は創を被り，馳せて隴城（甘肅省渭水道清水縣の北、現・天水市清水縣）に還り，使いを遣わして保に詣らしめ，貢獻して絶えず。

■**代** **〔拓跋猗盧は初めて代王を称す〕** 詔して**拓跋猗盧**の爵を進めて代王と為し、官屬を置き、代、常山（既に石勒支配下）の二郡を食ましむ。**猗盧**は并州從事の雁門の**莫含**を**劉琨**に請い、**琨**は之を遣る。**含**は行くを欲せず、**琨**は曰く、

「并州の單弱なると、吾之材あらずを以て、而して能く自ら胡、羯之間に存する者は、代王之力也。吾は身を傾け貲を竭くして、長子（遵）を以て質と為し而して之を奉ずる者は、庶幾うに朝廷の為に大恥を雪がん也。卿は忠臣為らんと欲し、奈何ぞ事を共にする之小誠を惜しんで、而して國に徇う之大節を忘れる乎？往きて代王に事え、之が腹心と為れば、乃ち一州之頼む所也。」

含は遂に行く。**猗盧**は甚だ之を重んじ、常に與に大計に參じる。

代 **〔拓跋猗盧は法を嚴に用いる〕** **猗盧**は法を用いるに嚴なり、國人の法を犯す者は、或は部を擧げて誅に就き、老幼は相い攜えて而して行き、人は問うに、

「何くに之くや？」

曰く、

「往きて死に就く。」

一人の敢えて逃匿する者無し。

■ **〔杜弼の乱、一時睿に降るもまた反す〕** 王敦は**陶侃**、**甘卓**等を遣わして**杜弼**（ここでは杜苾とせず）を討ち、前後數十戦し、弼の將士は多く死し、乃ち降を丞相の**睿**に請い、**睿**は許さず。弼は南平太守の**應詹**に書を遣りて、自ら陳べる、

「昔**詹**と共に樂郷を討ち、本より休戚を同じくす。後に湘中（87 卷懷帝永嘉五年）に在り、死を懼れ生を求め、遂に相い結聚す。倘し舊交之情を以て、為に枉直（曲直）を明らかにし、誠を盟府（琅邪王睿は東南方鎮の盟主、その府）に輸し、列に義徒に廁わるを得使めば、或は北に中原を清め、或は西に**李雄**を取り、以て前愆（以前の過失）を贖い、死之日と雖も、猶ほ生きる之年のごとし也！」

詹は為に其の書を啟呈し、且つ言く、

「弼は、益州の秀才（羅尚は益州刺史の時に弼を秀才に挙げる）なり、素より清望有り、郷人の逼る所と為る。今惡を悔いて善に歸し、宜しく命じて（人をして）扶納（続は撫納）せ使め、以て江、湘之民を息むべし！」

睿は乃ち前南海太守の**王運**をして弼の降を受け使め、其の反逆之罪を赦し、弼を以て巴東監軍と為す。弼は既に命を受け、諸將は猶ほ之を攻めて已まず。弼は憤怒して勝えず、遂に**運**を殺して復た反し、其の將の**杜弘**、**張彥**を遣わして臨川（呉の孫亮の太平二年に豫章東部都尉を分けて郡を立てる、江西省豫章道臨川縣、現・撫州市臨川区）内史の**謝擒**を殺し、遂に豫章を陷とす。**三月**、**周訪**は**彥**を撃ち、之を斬り、**弘**は臨賀（蒼梧郡の縣、江西省桂林道賀縣、現・賀州市八歩区）に奔る。

【漢の太弟劉乂の排除】

漢 漢は大赦し、改元して建元とする。

漢 **〔太弟の乂の側近は謀反を勧め幽閉〕** 雨血は漢の東宮の延明殿にふり、太弟の**乂**は之を惡み、以て太傅の**崔瑗**、太保の**許遐**に問う。**瑗**、**遐**は**乂**に説きて曰く、

「主上は往日**殿下**を以て**太弟**と為す者、以て衆の心を安ぜんと欲する耳。其の志は**晉王**（聰の子の榮）に在ること久し矣、王公已下は旨を**希**い之に附かざるは莫し。今復た（事は前年に見える）**晉王**を以て相國と為し、羽儀は威重く、**東宮**より逾え、萬機之事は、之に由らざる無し、諸王は皆な營兵を置き以て羽翼と為

し、事勢は已に去る。殿下は徒^{ただ}に立つを得ざるのみに非らざる也、朝夕且つ測られざる之危有り、早く之の計を為すに如かず。今四衛（東宮の前後左右の衛卒）の精兵は五千を減ぜず、相國は輕佻（輕はずみ）にして、正に一刺客を煩わす耳。大將軍（榮の弟の渤海王敷）は日に其の營を出でざる無く襲いて而して取る可し。餘王は並びて幼なり、固より奪うに易き也。苟くも殿下に意有れば、二萬の精兵は指顧に得る可く、鼓行して雲龍門に入れば、宿衛之士は、孰か戈を倒して以て殿下を迎えざる者をや！大司馬（中山王曜）は其の異を為すを慮らざる也。」

父は従わず。東宮の舍人の荀裕は、

「璋、遐は父に謀反を勧める」

と告げ、漢主の聰は璋、遐を詔獄に収め、假りに他事を以て之を殺す。冠威將軍の卜抽をして兵を將いて東宮を監守せしめ、父を禁じて朝會を聽さず。父は憂懼して為す所を知らず、上表して庶人と為り、並びて諸子之封を除くを乞い、晉王を褒美し、以て嗣と為さんと請う。抽は抑えて而して通じず。

漢 **【劉聰は石勒が曹嶷を討つを許さず】** 漢の青州刺史の曹嶷は盡く齊、魯間の郡縣を得て、自ら臨菑に鎮し、衆十餘萬有り、河に臨みて戍を置く。石勒は表して稱す、

「嶷は東方を專據する之志有り、之を討つを請う。」

漢主の聰は勒の嶷を滅ぼせば、復た製す可からざるを恐れ、許さず。

漢 **【劉聰の皇后乱発、陳元達は極諫】** 聰は中護軍の靳准の二女の月光、月華を納れ、月光を立てて上皇后と為し、劉貴妃を左皇后と為し、月華を右皇后と為す。左司隸（左右を置く）の陳元達は極諫し、以て為す、

「三后の並び立つは、禮に非らざる也。」

聰は悦ばず、元達を以て右光祿大夫と為し、外に優崇を示し、實は其の權を奪う。是に於いて太尉の范隆等は皆な位を以て元達到譲らんと請い、聰は乃ち復た元達を以て御史大夫、儀同三司と為す。月光は穢行（不道德な行為。みだらな行ない、恐らく間男）有り、元達は之を奏す、(5-281p) 聰は已むを得ず之を廢す、月光は慚恚（恥じ怒る）して自殺し、聰は元達を恨む。

■夏，四月，大赦す。

漢 **【霸陵の盜掘と金銀流用】** 六月，盜（盜掘者）は漢の霸（霸陵、漢書文帝紀に「文帝治霸陵。皆瓦器。不以金銀銅錫爲飾。」、漢長安城未央宮前殿遺址東南 57 公里）、杜（杜陵、前漢宣帝の陵墓）の二陵及び薄太后の陵（南陵、霸陵の南）を發き、金帛を得ること甚だ多く、朝廷は用度の足らざるを以て、詔して其の餘を収めて以て内府を實たす。

■辛巳（19日），大赦す。

漢 **【劉曜は劉琨を襄垣に破る】** 漢の大司馬の曜は上黨を攻め、八月，癸亥（2日），劉琨之衆を襄垣（上黨郡の県、山西省冀寧道襄垣県、現・長治市襄垣県）に敗る。曜は進みて陽曲（劉琨の根拠地、山西省冀寧道太原県、現・太原市晋源区 or 陽曲県）を攻めんと欲し、漢主の聰は遣使して之に謂って曰く、

「長安は未だ平らがず、宜しく以て先と為すべし。」

曜は乃ち還りて蒲板に屯す。

【王敦・陶侃と杜弢・杜會の戦い】

■ **【陶侃は杜弢を破り、王敦は驕横】** 陶侃は杜弢と相い攻め、弢は王貢をして出でて挑戦せしめ、侃は遙^{はるか}に之に謂って曰く、

「杜駿は益州の小吏と為り、庫錢を盗用し、父死して喪に奔らず。卿は本々佳人なり、何為れぞ之に隨うや！天下は寧んぞ白頭の賊有る邪（賊となつては白髪になるまで長生き出来ない）？」

貢は初め脚を馬上に横たえ、侃の言を聞き、^{かたち}容^{おさ}を斂めて脚を下ろす。侃は動かす可きを知り、復た遣使して之を諭し、發（^は髪）を^き截りて信と為し、貢（前巻で陶侃に叛く）は遂に侃に降る。駿の衆は潰え、遁げ走り、道に死す。侃は南平太守の應詹と進みて長沙（杜駿の根拠地）に克ち、湘州（307-328、412-416、422-431、439-589に設置と改廃分離頻繁）は悉く平らぐ。丞相の睿は製を承けて其の部する所を赦し、王敦を鎮東大將軍に進め、都督江、揚、荆、湘、交、廣六州諸軍事、江州刺史を加える。敦は始めて自ら刺史以下を選び置き、^{ようや}浸く益々驕横なり。

■ 「王敦は王如に従弟の稜を殺害させる」 初め、王如之降る也（前巻懷帝永嘉六年）、敦の従弟の稜は如の驍勇を愛し、敦に己の麾下に配すを請う。敦は曰く、

「此の輩は險悍（^{あやしく}悍）にして^{やしな}畜い難し、汝の性は狷急（偏急）にして、容れ養う能わず、更に禍端を成さん。」

稜は固く請い、乃ち之を與える。稜は左右に置き、甚だ寵遇を加える。如は數々敦の諸將と角射（射る競技）して争い^{たたか}鬥い、稜は之を杖ち、如は深く以て恥と為す。敦の潜かに異志を畜えるに及び、稜は毎に之を諫める。敦は其の己に異なるを怒り、密かに人をして如を激せ使め稜を殺さ令む。如は閒宴（^{あひだ}閑宴）に因りて、劍舞して歡を為さんと請い、稜は之を許す。如は劍を舞い漸く前み、稜は惡み而して之を呵し、如は直ちに前みて稜を殺す。敦は之を聞き、陽りて驚き、亦た如を捕えて之を誅す。

■ 「杜曾は第五猗を襄陽に迎える」 初め、朝廷は張光の死する（前巻元年）を聞き、侍中の第五猗を以て安南將軍、監荆、梁、益、寧四州諸軍事、荊州刺史と為し、武關より出でしむ。杜曾是猗を襄陽に迎え、兄の子の為に猗の女を娶り、遂に兵萬人を聚めて、猗と漢、沔に分けて據る。

■ 「杜曾是陶侃を破るも告辭して去る」 陶侃は既に杜駿を破り、勝ちに乗りて進みて曾を撃ち、曾を輕んじる之志有り。司馬の魯恬は諫めて曰く、

「凡そ戦いは、當に先ず其の將を料るべし。今使君の諸將は、曾に及ぶ者無く、未だ逼る可きこと易からざる也。」

侃は従わず、進みて曾を石城（^{きやうりやう}竟陵郡治所、湖北省襄陽道鍾祥県、現・荊門市鍾祥市）に圍む。（5-282p）曾の軍は騎兵多く、密かに開門して侃の陳を突き、其の後ろに出で、之に反撃し、侃の兵の死者は數百人なり。曾是將に順陽に趨かんとし、下馬して侃を拜し、辭を告げて而して去る。

■ 「荀崧は周訪の救援で杜曾の包圍を破る」 時に荀崧は荊州江北（沔北に作るべし）諸軍事を都督し、宛に屯し、曾是兵を引いて之を圍む。崧の兵は少なく食は盡き、救いを故吏の襄城太守の石覽に求めんと欲す。崧の小女の灌は、年は十三、勇士數十人を帥いて、城を逾えて圍を突いて夜出でて、且つ戦い且つ前み、遂に覽の所に達す。又た崧の書を為り、救いを南中郎將の周訪に求める。訪は子の扶を遣わして兵三千を帥いて、覽と共に崧を救い、曾是乃ち遁げ去る。

■ 「陶侃は杜曾の危険を説くも荀崧は従わず」 曾是復た崧に箋を致し、丹水（順陽郡の県、河南省汝陽道内郷県の西南、丹水に臨む、現・南陽市内郷県）の賊を討ちて以て自ら效さんと求め、崧は之を許す。陶侃は崧に書を遣りて曰く、

「杜曾是凶狡にして、謂う所の『鴟梟は母を食らう之物』なり。此の人は死せざれば、州土は未だ^{やす}寧からん、足下は當に吾が言を識（記憶認識）すべし！」

崧は宛中の兵少なきを以て、曾に藉りて外援と為し、従わず。曾是復た流亡二千餘人を帥いて襄陽を圍

み、數日にして、克たず而して還る。

■ 〔王敦は錢鳳の誹りで陶侃を殺さんとするも留まる〕 王敦の嬖人の吳興の錢鳳は、陶侃之功を疾み、屢々之を毀る。侃は將に江陵に還らんとし、敦に詣りて自ら陳ぜんと欲す。朱伺及び安定の皇甫方回は諫めて曰く、

「公は入りて必ず出でず。」

侃は従わず。既に至り、敦は侃を留めて遣らず、廣州刺史に左轉し、其の從弟の丞相の軍咨祭酒の虞を以て荊州刺史と為す。荊州の將吏の鄭攀、馬俊等は詣りて、上書して侃を留めんとし、敦は怒り、許さず。攀等は侃の始めて大賊（杜弢）を滅ぼし、而して更に黜け被れ、衆情は憤惋するを以て、又た虞が忌戾にして事え難きを以て、遂に其の徒三千人を帥いて湓口（湓水の黄河に入る所、湖北省江漢道旧漢陽府、現・武漢市蔡甸区）に屯し、西に杜曾を迎える。湓は攀等の襲う所と為り、江安（南平郡の県、湖北省荊南道公安県、現・荊州市公安県）に奔る。杜曾は攀等と北に第五猗を迎え以て虞を拒む。虞は諸軍を督して曾を討ち、復た曾の敗る所と為る。敦は攀が侃の風旨を承けると意い、甲を被り矛を持ち將に侃を殺さんとし、出で而して復た還る者數四なり。侃は正色して曰く、

「使君は雄斷し、當に天下を裁すべし、何ぞ此れ決せざる乎！」

因りて起ちて廁に如く。咨議參軍の梅陶、長史の陳頌は敦に言つて曰く、

「周訪は侃と親姻（友として、また娘を侃の子瞻の妻にする）にして、左右の手の如く、安んぞ人の左手を斷ち而して右手應じざる者有る乎！」

敦は意解け、乃ち盛饌を設けて以て之に餞し、侃は便ち夜發し、敦は其の子の瞻を引いて參軍と為す。

■ 〔交州・廣州の諸勢力混乱を王敦收拾〕 初め、交州刺史の顧秘の卒するや、州人は秘の子の壽を以て州事を領せしむ。帳下督の梁碩は兵を起こして壽を攻め、之を殺し、碩は遂に交州に專制す。王機は自ら廣州に盜據する（前卷懷帝永嘉六年）を以て、王敦の之を討つを恐れ、更に交州を求める。會々杜弘（杜弢の將、杜弢が敗れて機に降る）は機に詣りて降り、敦は機に因りて以て碩を討たんと欲す。乃ち杜弘を降すを以て機の功と為し、交州刺史に轉ず。（5-283p）機は鬱林（郡、広西省蒼梧道桂平県の東、現・広西チワン族自治区貴港市桂平市）に至り、碩は前刺史の脩則の子の湛を迎えて州事を行わしめ以て之を拒む。機は進むを得ず、乃ち更に杜弘及び廣州の將の溫邵、交州の秀才の劉沈と謀りて復た還りて廣州に據る。陶侃は始興（広東省嶺南道始興県の西北、現・韶關市始興県）に至り、州人は皆な言う、

「宜しく形勢を觀察し、輕々しく進む可からず。」

侃は聽かず、直ちに廣州（南海郡番禺県、広東省粵海道番禺県、現・広州市番禺区）に至り、諸郡縣は皆な已に機を迎える矣。杜弘は遣使して偽り降り、侃は其の謀を知り、進みて弘を撃ち、之を破り、遂に劉沈を小桂（桂林県、広西省桂林道象県、現・桂林市）に執る。督護の許高を遣わして王機を討ち、之を走らす。機は道に於いて病死し、高は其の屍を掘り、之を斬る。諸將は皆な勝ちに乗りて溫邵を撃つを請い、侃は笑いて曰く、

「吾が威名は已に著われ、何ぞ兵を遣わす事をや！但だ一函の紙は自ら定（晉書陶侃傳には足るに作る）まる耳。」乃ち書を下して之を諭す。邵は懼れ而して走り、追いて始興に獲る。杜弘は王敦に詣りて降り、廣州は遂に平らぐ。

■ 〔陶侃の廣州平和の憂鬱〕 侃は廣州に在り事無ければ、輒ち朝に百甃（敷き瓦）を齋外に運び、暮に齋内に運ぶ。人は其の故を問う、答えて曰く、

「吾は方に力を中原に致し、過爾（徒らに日を過ぐす貌）優逸すれば、恐らくは事に堪えず、故に自ら勞する

耳。

■王敦は杜弘を以て將と為し、之を寵任す。

漢 **【劉聰は石勒を征伐専任】** 九月，漢主の聰は大鴻臚をして石勒に弓矢を賜わり，勒を策命して陝東伯と為し，征伐を専らにし，刺史、將軍、守宰を拜し，列侯に封じるを得使め，歲盡に集めて上さしむ（授ける所の官爵・姓名を集めて上奏）。

■**漢** **【晉漢の北地の攻防】** 漢の大司馬の曜は北地（晉の北地郡は漢より狭い、甘肅省旧寧夏・慶陽府等を含む）を寇し，詔して麴允を以て大都督、驃騎將軍と為し以て之を御がしむ。冬，十月，索綝を以て尚書僕射と為し、宮城の諸軍事を都督せしむ。曜は進みて馮翊（郡、現・渭南市・西安市）を抜き、太守の梁肅は萬年（秦の櫟陽県を漢高祖が萬年県とす、陝西省關中道臨潼県の東北、現・西安市臨潼区）に奔る。曜は轉じて上郡を寇し，麴允は黃白城を去り，靈武（甘肅省寧夏道寧朔県の西北、現・銀川市靈武市）に軍す，兵の弱きを以て，敢えて進まず。

■ **【晉は長安以西を失う】** 帝は屢々兵を丞相の保に徴し，保の左右は皆な曰く，「蝮蛇（まむし）は手を螫（毒で刺すの意）せば，壯士は腕を斷つ。今胡は寇すること方に盛んにして，且く宜しく隴道を斷ちて以て其の變を觀るべし。」

從事中郎の裴詵は曰く、

「今蛇は已に頭を螫す，頭は斷つ可けん乎！」

保は乃ち鎮軍將軍の胡崧を以て前鋒都督を行わしめ，諸軍の集まるを須ち乃ち發せしむ。麴允は帝を奉じて往きて保に就かんと欲し，索綝は曰く、

「保は天子を得，必ず其の私の志を逞しくせん。」

乃ち止む。是に於いて長安より以西は，復た朝廷を貢奉せず，百官は饑乏し，糴（野生の稲）を采りて以て自ら存す。

前涼 涼州軍士の張冰は璽を得，文に曰う、「皇帝行璽」と，張寔に獻じ，僚屬は皆な賀す。寔は曰く，「是は人臣の留めるを得る所に非ず。」（晉の諸征鎮で君臣の分を知るは張氏のみ）（5-284p）

遣使して長安に歸す。

孝愍皇帝下建興四年（丙子，316年）

■春，正月，司徒の梁芬は吳王の晏を追尊するを議し，右僕射の索綝等は魏の明帝の詔（71 卷太和三年に見え）を引きて以て不可と為す。乃ち太保を贈り，諡して孝と曰う。

【靳准の太弟乂への陰謀】

漢 **【劉聰後宮に入り浸り、側近は貪殘】** 漢の中常侍の王沈、宣懷、中宮僕射の郭猗等は，皆な寵幸せられて事を用いる。漢主の聰は後宮に游宴し，或いは三日醒めず，或いは百日出でず。去冬より朝を視ず，政事は一に相國の粲に委ね，唯だ殺生、除拜は乃ち沈等をして入りて之を白さ使む。沈等は多く白さず，而して自ら其の私意を以て之を決し，故に勳舊は或いは敘せられず，而して奸佞の小人は數日にして二千石に至る者有り。軍旅は歲ごとに起こり，將士は錢帛之賞無く，而して後宮之家は，賜わりもの及び僮僕は，動もすれば數千萬に至る。沈等の車服、第捨（第舍、邸宅）は諸王を逾え，子弟の中表（いとこ）の守令と為る者は三十餘人，皆な貪殘にして民の害と為る。靳准の闔宗（一族）は諂いて之に事える。

漢 **【郭猗・靳准の太弟乂追い落としの陰謀】** 郭猗は准と皆な太弟の乂に怨有り，猗は相國の粲に謂って

曰く、

「**殿下**は**光文帝**之世孫、**主上**之嫡子なり、四海に心を屬せざる莫し、奈何ぞ天下を以て**太弟**に與えんと欲す乎！且つ臣は聞くに**太弟**は大將軍と三月上巳の大宴に因りて亂を作さんと謀り、事成れば、**主上**を以て太上皇と為し、大將軍（**榮**の弟の驥）を**皇太子**と為すを許し、又た衛軍（**榮**の弟の勳を衛大將軍とす）を大單于と為すを許すと。二王（テキストの三王は誤りか、続は二王）は疑われざる之地に處り、並びて重兵を握り、此を以て事を舉げれば、成さざる者は無し。然るに二王は一時之利を貪り、父兄を顧みず、事成る之後は、**主上**は豈に全くするの理有るや？**殿下**の兄弟は、固より言を待たず。東宮、相國、單于、當に武陵の兄弟（**父**の諸子）に在り、何ぞ肯えて人に與えん也！今禍いの期は甚だ迫り、宜しく早に之を圖るべし。臣は屢々**主上**に言うも、**主上**は友愛に篤く、臣が刀鋸之餘りなるを以て、終に之を信ぜず。願はくは**殿下**は洩れる勿かれ、密かに其の狀を表せよ。**殿下**は倘し臣を信じざれば、大將軍の從事中郎の**王皮**、衛軍の司馬の**劉惇**を召し、之に恩意を假し、其の首を歸すを許し以て之を問うべし、必ず知る可き也。」

榮は之を許す。**猗**は密かに**皮**、**惇**に謂って曰く、

「二王の逆狀は、**主上**及び相國は具に之を知る矣、卿は之に同じる乎？」

二人は驚いて曰く、

「之れ無し。」

猗は曰く、

「茲の事は已に決す、吾は卿の親舊並びに族せ見るるを憐れむ耳！」

因りて歔歔（吸り泣く）して流涕す。二人は大いに懼き、叩頭して哀を求める。**猗**は曰く、

「吾は卿の計を為せば、卿は能く之を用いる乎？相國は卿に問えば、卿は但だ云うべし『之れ有り』と。若し卿に先ず啟せざるを責めれば、卿は即ち云うべし『臣は誠に死罪を負う。然れども仰ぎ惟るに**主上**の寛仁、**殿下**の敦睦なるを、苟くも言いて信ぜ見れざれば、則ち誣譖測らざる之誅に陷ち、故に敢えて言わざる也。』と」

皮、**惇**は許諾す。**榮**は召して之を問い、(5-285p) 二人は至るに時を同じくせず、而るに其の辭は一の若し、**榮**は以て信に然りと為す。

漢〔**斬准**は**榮**を説いて謀略〕**斬准**は復た**榮**を説いて曰く、

「**殿下**は宜しく自ら東宮に居り、以て相國を領し、天下をして早に繋る所有ら使むべし。今道路之言は、皆な雲うに大將軍、衛將軍は**太弟**を奉じて變を為さんと欲す、期は季春を以てすと。若し**太弟**をして天下を得使めれば、**殿下**は足を容れる之地無し矣。」

榮は曰く、

「之を為すに奈何せんや？」

准は曰く、

「人が**太弟**が變を為すを告げれば、**主上**は必ず信じず。宜しく東宮之禁を緩め、賓客をして往來するを得使むべし。**太弟**は雅より好みて士を待つ、必ず此を以て嫌いと為さざらん、輕薄なる小人は**太弟**之意に迎合して之が謀を為す者無く能わざるなり。然る後に下官は**殿下**の為に其の罪を表に露わし、**殿下**は其の賓客の**太弟**と交通する者を収めて之を考問し、獄辭が既に具さになれば、則ち**主上**は之を信ぜざるの理無き也。」

榮は乃ち**卜抽**に命じて兵を引いて東宮（**父**が居る）を去らしむ。

漢 **〔陳休・ト崇の気骨〕** 少府の陳休、左衛將軍のト崇は、人と為りは清直にして、素より沈等を惡み、公座に在ると雖も、未だ嘗て與に語らず、沈等は深く之を疾む。侍中のト干は休、崇に謂って曰く、

「王沈等の勢力は以て天地を回すに足る、卿が輩は自ら親賢を料るに**竇武、陳蕃**（竇武の親なる、陳蕃の賢なるを以てすら宦官に苦しまられる、況んやという意味）に孰與ぞや？」

休、崇は曰く、

「吾が輩は年は五十を逾え、職位は已に崇く、唯だ一死を欠く耳！忠義に死せば、乃ち所を得ると為す。安んぞ能く首を俛れて眉を低くし以て閹豎（宦官）に事える乎！去れト公、復た言有る勿かれ！」

漢 **〔王沈は陳休・ト崇らを劉聰に誅殺させる〕** 二月、漢主の聰は出でて上秋閣（殿の西閣）に臨み、命じて陳休、ト崇及び特進の**慕容達**、太中大夫の**公彧**、尚書の**王琰**、**田歆**、大司農の**朱諧**を収め並びて之を誅せしむ、皆な宦官の惡む所也。ト干は泣いて諫めて曰く、

「陛下は方に席を側だてて賢を求め、而して一旦に卿大夫七人を戮す、皆な國之忠良なり、乃ち可からざる無し乎！藉使休等に罪有れども、陛下は之を有司に下し、其の狀を暴明せざれば、天下は何に従りてか之を知らん！詔は尚ほ臣の所に在り、未だ敢えて宣露せず（詔は侍中を通過する）、願はくは陛下は之を熟思すべし！」

因りて叩頭して流血す。王沈は干を叱して曰く、

「ト侍中は詔を拒まんと欲す乎！」

聰は衣を拂いて而して入り、干を免じて庶人と為す。

漢 **〔諸侯の訴えを退け、王沈を列侯とす〕** 太宰の河間王の**易**、大將軍の勃海王の**敷**、御史大夫の**陳元達**、金紫光祿大夫の西河王の**延**等は皆な闕に詣りて表して諫めて曰く、

「王沈等は詔の旨を矯り弄び、日月を欺き誣し、内に陛下に諂ひ、外に相國に佞り、威權之重きは、人主に倖しく、多く奸黨を樹て、毒は海内に流れる。休等は忠臣にして、國の為に節を盡くすを知り、其の奸狀を發かんを恐れ、故に巧みに誣陷を為す。陛下は察せず、遽に極刑を加え、痛みは天地に徹し、賢愚は傷つき懼れる。今遺晉は未だ殄きず、巴、蜀は賓せず、**石勒**は趙、魏（の故地）に據らんと謀り、**曹嶷**は全齊に王たらんと欲す、陛下の心腹四支は、何れの處にか患い無からん！乃ち復た沈等を以て亂を助け、**巫咸**（殷の巫の名）を誅し、**扁鵲**（昔の医者の名）を戮す（忠臣により國難を救うべきを巫医に喩えた）、（5-286p）臣遂に膏肓之疾（心臓と隔膜との間の部分くからだの中の奥深い所でここに病が入ると治らない）と成るを恐れ、後に之を救うと雖も、及ぶ可からざる已。沈等の官を免じ、有司に付けて罪を治めんを請う。」

聰は表を以て沈等に示し、笑いて曰く、

「群兒は元達の引く所と為り、遂に癡（癡れ者）と成る也。」

沈等は頓首して泣いて曰く、

「臣等は小人にして、過ちて陛下の識拔を蒙り、閹閣を灑掃するを得る。而して王公、朝士は臣等を疾んで仇の如し、又た深く陛下を恨む。願はくは臣等を以て鼎鑊（大鼎、煮炊きの釜）を膏せば（釜ゆでの刑）、則ち朝廷は自然に雍穆（和らぐ）せん矣。」

聰は曰く、

「此等の狂言は常に然り、卿は何ぞ恨むに足る乎！」

聰は沈等を相國の**掾**に問い、掾は盛んに沈等の忠清を稱す。聰は悦び、沈等を封じて列侯と為す。

漢 **〔太宰劉易は悶死、陳元達は自殺〕** 太宰の易は又た闕に詣りて上疏して極諫し、聰は大いに怒り、手ず

から其の疏を壊る。三月，易は忿恚し而して卒す。易は素より忠直にして，陳元達は之を倚として援を為し，諫諍を盡くすを得る。卒するに及び，元達は之を哭して慟して，曰く、

『人之雲に亡べば，邦國は殄瘁（てんすい 尽き憔悴）す。』吾は既に復た言う能わず，安んぞ黙黙として苟しくも生きるを用いん乎！』

歸り而して自殺す。

【拓跋猗盧の混乱】

代 **拓跋猗盧は長子六修に滅ぼされ、拓跋普根また滅ぼす** 初め，代王の猗盧は其の少子の比延を愛し，以て嗣と為さんと欲し，長子の六修をして出でて新平城（直隸省津海道遵化県、現・唐山市遵化市）に居らせめ，而して其の母を黜ける。六修には駿馬有り，日に五百里を行き，猗盧は之を奪い，以て比延に與える。六修は來朝し，猗盧は（六修をして）比延を拜せせめ，六修は従わず。猗盧は乃ち比延をして其の步輦（人が曳く輦）に坐せしめ，人をして導從せせめ出でて遊ばしむ。六修は望見し，以て猗盧と為し，伏して路左に謁す。至りて，乃ち比延なり，六修は慚じ怒り而して去る。猗盧は之を召して至らず，大いに怒り，衆を帥いて之を討ち，六修の敗る所と為る。猗盧は微服して民間に逃げ，賤婦人有りて之を識り，遂に六修の弑する所と為る。拓跋普根は先に外境を守り，難を聞きて來たり赴き，六修を攻め，之を滅ぼす。

代 **普根で代国大亂し、二將軍は劉琨に歸す** 普根は代わりて立ち，國中は大亂し，新舊（新人は晉人・烏桓人、舊人は索頭部、鮮卑族は弁髮）は猜嫌して，迭いに相い誅滅す。左將軍の衛雄、信義將軍の箕澹，久しく猗盧を佐け，衆の附く所と為り，劉琨に歸せんと謀り，乃ち衆に言つて曰く、

「聞く舊人は新人の悍戰するを忌み，盡く之を殺さんと欲す，將に奈何せん？」

晉人及び烏桓は皆な驚懼し，曰く、

「死生は二將軍に隨わん！」

乃ち琨の質子の遵と晉人及び烏桓三萬家、馬牛羊十萬頭を帥いて琨に歸す。琨は大いに喜び，親ら平城に詣りて之を撫納す，琨の兵は是に由り復た振う。

代 **夏，四月，普根は卒す。** 其の子は始めて生まれる，普根の母の惟氏（拓跋猗盧の妻）は之を立てる。

前凉 **張寔は長安を支援** 張寔は下令す、

「所部の吏民の能く其の過ちを擧げる者有れば，賞して布帛羊米を以てす。」

賊曹佐の高昌の隗瑾は曰く、

「今明公は政を為すに，事は鉅細無く，皆な自ら之を決す，或いは師を興し令を發するに，府朝（僚佐の集る所）は知らず。萬一違失あれば，謗りは分ける所無し（全責任を負う事になる）。群下は威を畏れ，成を受け而して已む。此くの如く，之を賞すること千金と雖も，終に敢えて言わざる也。（5-287p）謂うに宜しく少しく聰明を損し，凡そ百の政事は，皆な群下に延訪して，各々をして所懷を盡くさせめ，然る後に採り而して之を行うべし，則ち嘉言は自ら至し，何の必ずしも賞せん也！」

寔は悦び，之に従い，瑾の位三等を増す。寔は將軍の王該を遣わして步騎五千を帥いて入りて長安を援け，且つ諸郡の貢計（産物の貢納、計帳）を送る。詔して寔を拜して都督陝西諸軍事とし，寔の弟の茂を以て秦州刺史と為す。

漢 石勒は石虎をして劉演を廩丘に攻めせめ，幽州刺史の段匹磾は其の弟の文鴛をして之を救わしむ。虎

は廩丘を抜き、演は文鶩の軍に奔り、虎は演の弟の啟を獲り以て歸る。

■寧州刺史の王遜は、嚴猛にして誅殺を喜ぶ。五月，平夷（懷帝永嘉五年に王遜は表して置いた郡）太守の雷瓘、平樂（越雋部の邛部に置く）太守の董霸は三千餘家を帥いて叛し、成に降る。

■六月，丁巳（1日）朔，日食之れ有り。

漢[劉曜は北地を攻め取る] 秋，七月，漢の大司馬の曜は北地太守（晉の北地郡は泥陽・富平二県のみ）の麴昌を圍み，大都督の麴允は歩騎三萬を將して之を救う。曜は城を繞りて火を縱ち，煙は起りて天を蔽い，反間（間諜）をして允を給^{あざむ}か使めて曰く、
「郡城は已に陷ち，往くとも及ぶ無き也！」

衆は懼れ而して潰ゆ。曜は追いて允を礪石谷（陝西省關中道旧西安府内、現・西安市）に敗り，允は奔りて靈武に還り，曜は遂に北地を取る。

漢[麴允は威斷無し] 允の性は仁厚にして，威斷無く，喜ぶに爵位を以て人を悦ばす。新平太守の竺恢、始平太守の楊像、扶風太守の竺爽、安定太守の焦嵩は，皆な征、鎮を領し，節に杖り，侍中、常侍を加える。村塢の主帥の，小なる者さえ猶ほ銀青（銀印青綬を与える）將軍之號を假す。然るに恩は下に及ばす，故に諸將は驕恣に而して士卒は離れ怨む。關中は危うく亂れ，允は急を焦嵩に告げる。嵩は素より允を侮り，曰く、

「允が困しむを須^まちて，當に之を救わん。」

漢[劉曜は義士義婦の自殺を許す] 曜は進みて涇陽に至り，渭北の諸城は悉く潰える。曜は建威將軍の魯充、散騎常侍の梁緯、少府の皇甫陽を獲る。曜は素より充の賢ききを聞き，募りて之を生致（生け捕り）し，既に見みえ，之に酒を賜わりて曰く、

「吾は子を得たり，天下は定めるに足らざる也！」

充は曰く、

「身は晉將と為り，國家は喪い敗れる，敢えて生を求めず。若し公の恩を蒙むれば，速かに死するを幸いと為す。」

曜は曰く、

「義士也。」

之に劍を賜わり，自殺せ令む。梁緯の妻の辛氏は，美色なり，曜は召きて見，將に之を妻とせんとす，辛氏は大いに哭きて曰く、

「妾の夫は已に死し，義は獨り生きず，且つ一婦人は而して二夫に事えず，明公は又た安んぞ之を用いん！」

曜は曰く、

「貞女也。」

亦た自殺を聽す，皆な禮を以て之を葬す。

漢[劉聰の皇后十人、劉敷は切諫し憂憤卒] 漢主の聰は故の張后の侍婢の樊氏を立てて上皇后と為し，三后之外，皇后の璽綬を佩す者は復た七人有り。嬖寵（寵愛すること）は事を用い，刑賞は紊亂す。大將軍の敷は數々涕泣して切諫し，聰は怒りて曰く、

「汝は乃公（^{ないこう}我が輩）が速かに死せんと欲する邪，何を以て朝夕生きて來たりて人を哭するや！」

敷は憂憤し，病を發して卒す。（5-288p）

漢 [蝗害の流民を收容した石勒は曹嶷と結ぶ] 河東平陽は大いに蝗し、民の流殍（流民餓死）する者は什に五六なり。石勒は其の將の石越を遣わして騎二萬を帥いて并州に屯し、流民を招納し、民の之に歸する者は二十萬戸あり。聰は遣使して勒を讓め、勒は命を受けず、潜かに曹嶷と相い結ぶ。

漢 八月、漢の大司馬の曜は長安に逼る。

漢 九月、漢主は群臣を光極殿に宴し、太弟の乂を引見す。乂の容貌は憔悴し、鬢髮蒼然として、涕泣して陳謝し、聰も亦た之が為に慟哭す。乃ち酒を 縱^{ほしいまま}にして歡を極め、之を待すること初めの如し。

【長安陥落】

■ [胡崧は麴允・索綝の勃興を警戒] 焦嵩、竺恢、宋哲は皆な兵を引いて長安を救い、散騎常侍の華輯は京兆、馮翊、弘農、上洛の四郡の兵を監して、霸上に屯す、皆な漢兵の強きを畏れ、敢えて進まず。相國の保は胡崧を遣わして兵を將いて入援し、漢の大司馬の曜を靈台（周の文王の靈台は長安の西 40 里にあり）に撃ち、之を破る。崧は國威の復た振いて則ち麴（麴允）、索（索綝）の勢い盛んなるを恐れ、乃ち城西の諸郡の兵を帥いて渭北に屯し進まず、遂に槐裡（統は槐里、始平郡の県、陝西省關中道興平県の東南、現・咸陽市興平市）に還る。

■ 漢 [索綝の詭計を劉曜は許さず] 曜は攻めて長安の外城を陥し、麴允、索綝は退きて小城を守り以て自ら固める。内外は斷絶し、城中は饑えること甚しく、米の斗は直金二兩にして、人相い食み、死者は太半し、亡逃は制す可からず、唯だ涼州の義衆千人（張軌親子の送る義兵）は、死を守りて移らず。太倉に麴數十餅有り、麴允は之を屑きて粥と為し以て帝に供し、既に而して亦た盡きる。冬、十一月、帝は泣いて允に謂って曰く、

「今窮厄すること此くの如し、外に救援無く、當に恥を忍んで出で降れば、以て士民を活かすべし。」

因りて歎じて曰く、

「我が事を誤まる者は、麴、索の二公也！」

侍中の宗敞をして降る箋を曜に送ら使む。索綝は潜かに敞を留め、其の子をして曜に説か使めて曰く、

「今城中の食は猶ほ一年を支えるに足り、未だ克つに易からざる也、若し綝に許すに車騎（統には欠）、儀同、萬戸郡公を以てする者ならば、請う城を以て降らん。」

曜は斬り而して之を送り、曰く、

「帝王之師は、義を以て行ふ也。孤は兵を將いて十五年、未だ嘗て詭計を以て人を敗らず、必ず兵を窮め勢いを極めて、然る後に之を取る。今索綝の言う所は此くの如し、天下之惡は一也、輒ち相い為に之を戮す。若し兵食^{まこと}審に未だ盡きざる者ならば、便ち勉強して固く守る可し。如し其の糧竭き兵微ならば、亦た宜しく早く天命を寤^{さと}るべし。」

■ 漢 [西晉皇帝は劉聡に降り平陽に遷る] 甲午（10日）、宗敞は曜の營に至る。乙未（11日）、帝は羊車に乗り、肉袒して、壁を銜え、櫬を輿い東門を出でて降る。群臣は號泣し、車を攀じ帝の手を執り、帝も亦た悲しみて自ら勝たず。御史中丞の馮翊の吉朗は歎じて曰く、

「吾は智謀る能わず、勇は死す能わず、何ぞ君臣の相い隨い、北面して賊虜に事えるを忍びん乎！」

乃ち自殺す。曜は櫬を焚き壁を受け、宗敞をして帝を奉じて宮に還ら使む。丁酉（13日）、帝及び公卿以下を其の營に遷す。辛丑（17日）、送りて平陽に至る。壬寅（18日）、漢主の聰は光極殿に臨み、帝は前に稽首す。麴允は地に伏して慟哭して、扶けて起つ能わず。聰は怒り、之を囚え、允は自殺す。聰は帝を以て光祿大夫と為し、懷安侯に封じる。(5-289p) 大司馬の曜を以て假黃鉞、大都督、督陝西諸軍事、

太宰と為し、秦王に封じる。大赦し、改元して麟嘉とす。**麴允**の忠烈なるを以て、車騎將軍を贈り、謚して節愍侯とす。**索綝**の不忠なるを以て、都市に斬る。尚書の**梁允**、侍中の**梁浚**等及び諸郡守は皆な曜の殺す所と為り、**華輯**は南山に奔る。

■ 〔司馬懿の後継はよく保つ〕 干寶は論じて曰く、「昔**高祖宣皇帝**（司馬懿）は、雄才（優れた才能）碩量（広大な心）を以て、時に應じ而して起こり、性は深阻（山が深く険しい）にして城府の若く有り、而して能く寛綽（寛闊不狹窄）にして以て容納（寛容）す。數術を行ひ以て物を御し、而して人を知りて善く采拔す。是に於いて百姓（天下皆）は能く與にし、大象（晉の興盛の大業）は始めて構える。**世宗**は基いを承け、**太祖**は業を繼ぎ、鹹な異圖（しりぞ）を黜（しりぞ）け（内に李豊・夏侯玄を誅殺、外に毌丘儉・文欽・諸葛誕を討伐）、用つて前烈を融す（前帝の大業を明かにする）。**世祖**（司馬昭）に至り、遂に皇極（天子の位）を享け、仁以て下に厚くし、儉以て用に足り、和し而して弛めず、寛而して能く斷じ、唐、虞之舊域を掩い、正朔を八荒（八方の荒服の地）に班じ、時に於いて『天下に窮人無し』之諺有り、太平未だ洽（あまね）かならずと雖も、亦た以て民の其の生を樂しむを明らかにするに足る矣。」

■ 〔司馬昭没後は一気に凋落の原因〕 **武皇**は既に崩じ、山陵は未だ乾かず而して變難（八王の乱）は繼いで起こる。宗子は維れ城（詩に曰く、徳を懷えば惟れ寧し、宗子は維れ城と）之助け無く、師尹（天子の教育係、大師の尹氏）は具に瞻（み）る（詩に曰く、赫赫たる師尹、民具に爾を瞻ると）之貴き無く、朝に**伊**、**周**と為り、夕に**桀**、**跖**（古代春秋時代の泥棒の名前）と成る。國政は迭（たが）いに亂人に移り、禁兵は外は四方に散じ、方岳は鈞石之鎮無し（三十斤を鈞と為し、四鈞を石と為す）、關門は草を結ぶ（左傳に、晉の輔氏の役に魏顆は老人が草を結びて以て杜回を亢ぐを見る、杜回は躓きて顛る、故にこれを獲るたり。方岳は輕薄にして重任に堪えず、關塞の禁、草を結びて以て人を攔るにも如かざるをいう）之固き無し。戎、羯は制を稱し、二帝は尊きを失うは、何ぞ哉？樹立の權を失ひ（繼嗣を樹立すること、權宜を失う）、托付（後繼者の後見委託）は才非らず、四維（礼儀廉恥）は張らず、而して苟且（その場限りの間に合わせ）之政（まつりごと）多き也。」

■ 〔晉の統一は仕組みが足りない〕 「夫れ基い廣ければ則ち傾き難く、根深ければ則ち抜き難し、理節（政教に條理節度）あれば則ち亂れず、膠結（仁政を以て人心を結ぶ）すれば則ち遷らず。昔之天下を有つ者は能く長く久しき所以は、此の道を用いる也。周は后稷が民を愛するより、十六王は而して武始めて之に君たり、其の基いを積み本を樹てるは、此くの如く其れ固し。今晉之興こる也、其の基（続は業）を創（つく）り本を立て、固より先代に異なる矣。加えるに以て朝に純徳之人寡なく、郷に不二之老（二心の無い老人）乏しく、風俗は淫僻にして、恥尚（ちしやう）は所を失う（恥じるべき者が恥じず、尚ぶべき者が尚ばず）。學者は莊、老を以て宗と為し而して《六經》を黜け、談者は虚蕩（浮夸而不切實際）を以て辯と為し而して名檢（法度）を賤しみ、（5-290p）身を行ふ者は放濁（放情濁行）を以て通と為し而して節信を狭しとし、進み仕える者は苟くも得るを以て貴と為し而して正しきに居るを鄙（いや）しみ、官に當たる者は空を望む（是非を知らずして署名）を以て高しと為し而して勤恪（まじめに勤める）を笑う。是を以て**劉頌**（武帝紀）は屢々道を治めるを言い、**傅鹹**（惠帝紀）は毎に邪正を糾すに、皆な之を俗吏と謂う。其の虚曠に倚杖（杖に頼る）し、無心に依阿する者は、皆な海内に名重し。夫れ**文王**の日の昃（かたむ）き食する暇あらず（文王は一日中仕事して万民を和らぐ）、**仲山甫**の夙夜（明け暮れ、一日中）懈たらざる若き者は、蓋し共に嗤（わら）い黜（しりぞ）け以て灰塵と為す矣！是に由りて毀譽（けなすと褒める）は善惡之實を亂し（善惡をけなし褒めること、皆その実にあたらない）、情慝（じやうとく）（邪なる情）は貨欲（みち）之塗に奔り、選ぶ者は人の為に官（えら）を擇び（官の為に賢者を選ばず）、官たる者は身の為に利を擇び、世族貴戚之子弟は、陵邁（級を越えて擢升す）超越し、資次（かきわ）に拘らず。悠悠たる風塵、皆な競に奔る（勢利に奔り競う）之士。列官千百は、賢に讓る之舉無し。**子真**（劉寔の字、82 卷武帝太康十年）は《崇讓》を著わし而して之を省みる莫く、**子雅**（劉頌の字、82 卷武帝太康十年）

は九班を制し而して用いるを得ず。其の婦女は女工を知らず、情に任せて而して動き、舅姑に逆う有り、妾媵を殺戮する有れども、父兄は之を罪せざる也、天下は之を非とする莫き也。禮法刑政は、此に於いて大いに壊れる。『國之將に亡びんとするは、本は必ず先に顛（ひっくり返る）れる、』其れ此之謂い乎！」

■ 【天下之勢いは既に去り、命世之雄才が取るしかない】「故に阮籍之行い（78 卷魏の元帝景元三年）を觀て而して禮教の崩れ弛む之由る所を覺り、庾純、賈充之爭い（79 卷武帝泰始七年八年）を察し而して師尹之僻多しを見、吳を平らげる之功（81 卷武帝太康元年）を考え而して將帥之讓らざるを知り、郭欽之謀（81 卷武帝太康元年）を思い而して戎狄之釁有るを寤り、傅玄、劉毅（武帝の時相前後して司隸となり、貴戚を避けず）之言を覽て而して百官之邪を得、傅鹹之奏（82 卷惠帝元康四年）、《錢神》之論（83 卷元康九年）を核とし而して寵賂（私寵と賄賂）之彰わるを睹る。民の風と國の勢いは、既に已に此くの如し、中庸（賢愚の中間）之才、守文之主（常を守り世を平治する）を以て之を治めると雖も、猶ほ亂を致さんことを懼る、況んや我が惠帝は放蕩之德を以て之に臨むを哉！懷帝は亂を承けて位を得、羈すに強臣を以てす。愍帝は播に奔る之後、徒らに虛名を守る。天下之勢いは既に去り、命世之雄才に非らざれば、復た之を取る能わず矣！」

【石勒の勢力拡大】

漢 【石勒は樂平を攻め、劉琨は積極迎撃】 石勒は樂平太守の韓據を拮据（拮据の誤り、山西省冀寧道昔陽県、晋中市昔陽県）に圍み、據は救いを劉琨に請う。琨は新たに拓跋猗盧之衆を得、其の銳氣に因りて以て勒を討たんと欲す。箕澹、衛雄は諫めて曰く、

「此れは晋民と雖も、久しく異域に淪み、未だ明公之恩信に習わず、恐らくは其れ用い難し。且く内は鮮卑（拓跋）之餘穀を收め、外には胡賊（劉聰・石勒）之牛羊を抄め、關を閉じ險を守り、農に務め兵を息め、其の化に服し義に感じるを待ち、然る後に之を用いるに若かず、則ち功の濟らざる無し矣！」

琨は従わず、悉く其の衆を發し、澹に命じて步騎二萬を帥いて前驅と為さしめ、琨は廣牧に屯して、之が為に聲援する。

漢 【石勒は劉琨勢力を撃破】 石勒は澹の至るを聞き、將に之を逆え撃たんとする。或は曰く、

「澹の士馬は精強にして、其の鋒は當たる可からず、且く兵を引いて之を避け、溝を深くし壘を高くし、以て其の銳を挫くに若かず、必ず萬全を獲ん。」

勒は曰く、

「澹の兵は衆しと雖も、遠來して疲弊し、號令は從（統は齊）わず、何の精強か之れ有らん！今寇敵は至るに垂々とし、何の捨て去る可けんや！大軍一たび動けば、豈に中ばに還り易からんや！若し澹が我之退くに乗而して之に逼れば、逃げ潰えるを顧るに暇あらず、焉んぞ深溝高壘を得る乎！此くは自ら亡ぶる之道也。」

立ちどころに言う者を斬る。孔萇を以て前鋒都督と為し、三軍を令せしむ、

「後れて出る者は斬る！」

勒は險要に據り、疑兵を山上に設け、前に二伏を設け、輕騎を出して澹と戦い、陽りて勝たざると為して而して走る。澹は兵を縦ちて之を追い、伏中に入る。勒は前後に澹の軍を夾撃して、大いに之を破り、鎧馬の萬計りを獲る。澹、雄は騎千餘を帥いて代郡に奔り、韓據は城を棄てて走り、並土震駭する。

■ 十二月，乙卯（1 日）朔，日食之れ有り。

■ 【劉琨は段匹磾に逃げ同盟】 司空長史の李弘は并州（陽曲に治す）を以て石勒に降る。劉琨の進退は據（拋

点)を失い、為す所を知らず、**段匹磾**は信を遣わして之を邀え、己未(5日)、**琨**は衆を帥いて飛狐(直隸省保定道涑水県、現・保定市涑水県)より薊に奔る。**匹磾**は**琨**を見、甚だ相い親重し、之と婚を結び、約して兄弟と為る。**勒**は陽曲(山西省雁門道定襄県、現・忻州市定襄県)、樂平の民を襄國に従し、守宰を置き而して還る。**孔萇**は**箕澹**を代郡に攻め、之を殺す。

漢 **〔石勒の遼西平定、李回と張寶の活躍〕** **萇**等は賊帥の**馬嚴**、**馮睹**を攻め、久しく而して克たず、司、冀、並、兗の流民數萬戸は遼西に在り、迭いに相い招引して、民は業に安んぜず。**勒**は計を濮陽侯の**張寶**に問い、**寶**は曰く、

「**嚴**、**睹**は本より公之深仇に非らず、流民は皆な戀本之志有り、今師を班して振旅し、良き牧守を選びて之を招懷せ使めれば、則ち幽、冀之寇は日ならず而して清む可く、遼西の流民は將に相い帥いて而して至らんとする矣。」

勒は乃ち**萇**等を召して歸り、武遂の令の**李回**を以て易北(易水以北)督護と為し、高陽(高河の陽にあり、直隸省保定道高陽県、現・保定市高陽県)太守を兼ねしむ。**馬嚴**の士卒は素より**回**の威徳に服し、多くは**嚴**に叛きて之に歸し、**嚴**は懼れ而して出で走り、水に赴きて死す。**馮睹**は其の衆を帥いて降る。**回**は徙りて易京(公孫瓚が築く、直隸省保定道雄県の西北、現・保定市雄県)に居り、流民の之に歸する者は道に相い繼ぐ。**勒**は喜び、**回**を封じて弋陽子と為し、**張寶**に邑千戸を増し、位を前將軍に進める。**寶**は固辭して受けず。

■ **〔司馬睿の北伐の動き〕** 丞相の**睿**は長安の守らざるを聞き、師を出して露次(野營)し、躬ら甲冑を擐き、(5-292p) 檄を四方に移し、日を刻して北征せんとする。漕運の稽期(期日に遅れる)を以て、丙寅(12日)、督運令史の**淳於伯**を斬る。刑者は刀を以て柱を拭い、血は逆流し、上りて柱末に至り二丈餘而して下る、觀る者は鹹な以て冤と為す。丞相の司直の**劉隗**は上言す、

「**伯**の罪は死に至らず、從事中郎の**周莛**等の官を免じるを請う。」
是に於いて右將軍の**王導**等は上疏して咎を引き、解職を請う。**睿**は曰く、
「政刑の中を失するは、皆な吾の暗塞の致す所なり。」

一に問う所無し。

■ **〔劉隗の弾劾を王氏は怨む〕** **隗**は性は剛訐にして、當時の名士は多く弾劾を被り、**睿**は率ね皆な容貸し、是に由りて衆の怨は皆な之に歸す。南中郎將の**王含**は、**敦**之兄也、族の強く位の顯なるを以て、驕傲にして自ら恣にし、一に參佐及び守長を請うこと二十許人に至る、多くは其の才に非ず。**隗**は**含**を劾奏して、文致は甚だ苦しく(嚴刻なる文で弾劾)、事は寢め被れると雖も、而して王氏は深く忌みて之を疾む。

■ 丞相の**睿**は**邵續**を以て冀州刺史と為す。**續**の女婿の廣平の**劉遐**は衆を河、濟之間に聚め、**睿**は**遐**を以て平原内史と為す。

拓跋 **〔拓跋普根〕** 之子は又た卒す、國人は其の從父の**鬱律**を立てる。

令和3年5月23日 翻訳開始 12158文字

令和3年6月3日 翻訳終了 25227文字 現代地名・年表対応

令和3年11月18日 書下し終了 25633文字